



こーひーぶれいく

## 星空案内人にまつわる エトセトラ

中森 健之

*Nakamori Takeshi*

子供のころの私は、買い与えられた図鑑のせいで星座やそれに関連する神話が好きでした。世代的に、星座をモチーフにした某少年マンガも影響が大きかったと思います。天文学者は星座を知らないというジョーク(?)がありますが、もちろん例外も大勢いるはずで、私もその中の1人です。

星空案内人という資格があります。この記事の執筆時点では星空案内人資格認定制度運営機構という団体が管理運営をしており、星空案内人の愛称である「星のソムリエ<sup>®</sup>」はこの団体が有する登録商標です(悪用からの自衛のため)。私は2016年にこの資格を取り、主に山形大学の公開天文台で星空案内をやっていました。星のソムリエ<sup>®</sup>は、もちろんワインのソムリエになぞらえたネーミングで、季節や場所、お客さんに合わせて星空や宇宙の話を提供します。自分はどこまでできているかわかりませんが、知識や技能よりおもてなしの精神が重要です。昨今耳にする機会も増えた、サイエンスコミュニケーターとも言えるでしょう。こういう活動をやっているせいで、サイエンスコミュニケーションの授業担当に充てられてしまったのは想定外でしたが。

星空案内人になるためには、資格認定講座を受講して、座学と実技についてそれぞれ所定の単位を取得する必要があります。天文学的な科学知識や望遠鏡を操作する技術だけでなく、人類の歴史と星空の文化的な側面も必修科目に指定されている、面白いカリキュラムです。講座は全国各地で開催されていて、開催地に応じた特色があります。

山形大学で実施されていた講座で科学科目の講師を依頼されたのを契機に、講座を受けてみることにしました。星空案内人って名前からしてちょっと興

味をそそるじゃないですか。ゆるい気持ちで初回のイントロ講義に臨んだわけですが、いきなり釘を刺されることになりました。資格コレクターとか資格を取ることが目的化している人に向けた講座ではありません、と。澄ました顔のまま後ろめたい気分で話を聞くことになるのですが、「星空案内をするのに資格は本来不要。自信を持つきっかけ、一步前に進む背中を押すための資格」という資格の精神を教わって講義を受けているうちに、自分も星空案内をやってみたくなってきたので我ながら単純なものです。自分が宇宙を学んでhappy、それを人に伝えて喜んでもらえたらhappy。すなわちHappy二乗の法則が星空案内人の合言葉になっています。実際に星空案内の現場に立ってみると、これは本当にそのとおりだと実感できます。体験しないと言葉では伝わりきれないのですが、本当にそのとおりです(大事なので2回言いました)。

このような資格制度は、山形で始まったという歴史があります。現・NPO法人小さな天文学者の会という団体が、山形大学の天文台で星空ガイドツアーを実施できる人材育成プログラムとして始まったようです。筆者は2020年よりNPOの理事長を引き継ぎ、コロナ禍の洗礼を受けながらも市民の皆さんと協力し、天文台を始めとする組織を運営しています。

前述した私の星空案内の場がこのガイドツアーです。毎週土曜に天候に関わらずオープンして、星空案内人と話ができる場が20年間提供され続けてきました。大学の施設である天文台を一般市民(の星空案内人)が中心となって公開運営するという珍しい形態です。同じ星空でも案内人によって語り口が違っているので、来るたびに新しい収穫があるツアーです。天候が悪いときの「くもりメニュー」も案内人の個性が出て楽しめます。私もオーソドックスな案内を中心にしつつ、時事ネタや流行り物を取り入れた案内ネタもときどき用意していますので、ぜひ「やまがた天文台」を検索して遊びに来てください。

(山形大学理学部)